

「アンティオキア教会」

2016年05月21日

使徒言行録 11 章 19 節～26 節。ステファノの事件をきっかけにして起こった迫害のために散らされた人々は、フェニキア、キプロス、アンティオキアまで行ったが、ユダヤ人以外のだれにも御言葉を語らなかった。しかし、彼らの中にキプロス島やキレネから来た者がいて、アンティオキアへ行き、ギリシア語を話す人々にも語りかけ、主イエスについて福音を告げ知らせた。主がこの人々を助けられたので、信じて主に立ち帰った者の数は多かった。このうわさがエルサレムにある教会にも聞こえてきたので、教会はバルナバをアンティオキアへ行くように派遣した。バルナバはそこに到着すると、神の恵みが与えられた有様を見て喜び、そして、固い決意をもって主から離れることのないようにと、皆に勧めた。バルナバは立派な人物で、聖霊と信仰とに満ちていたからである。こうして、多くの人々が主へと導かれた。それから、バルナバはサウロを捜しにタルソスへ行き、見つけ出してアンティオキアに連れ帰った。二人は、丸一年の間その教会に一緒にいて多くの人を教えた。このアンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになったのである。

ステファノの殉教を契機に、ユダヤ教徒たちはエルサレム教会の信者たちに迫害を加えるようになった。迫害を避けて信者たちは北に向かって逃れ、フェニキア、キプロス、アンティオキアまで行った。逃れて行った所で、ユダヤ人に対し御言葉を語り続けた。キプロスやキレネから来た者たちもアンティオキア教会に集まった。彼らはギリシア語を話す人々にも語りかけた。神は異邦人たちの心を開き、主イエスの福音を信じる者を起こされ、その数は増えていった。

異邦人も福音を信じたという噂がエルサレム教会に聞こえたので、バルナバをアンティオキア教会に派遣した。行って見ると、異邦人にも神の恵みが与えられている有様を見て、喜び、固い信仰を持って、主イエスから離れることのないようにと勧めた。アンティオキア教会はユダヤ人と異邦人が共に信仰と生活を分かち合う教会へと成長していった。

バルナバは立派な人物で、聖霊と信仰とに満ち、多くの人々に尊敬されていた。異邦人教会として成長するアンティオキア教会におけるバルナバの働きは大きいものであった。この時、バルナバはサウロ（パウロ）を捜しにタルソスへ行った。当初、サウロは主イエスを信じる者を迫害していたので、教会は容易にサウロを受け入れなかった。故郷タルソスで悶々としていたものと思われる。しかしバルナバは、異邦人信者が増えていく中で、サウロの働きが有用であると思ったに違いない。タルソスに行き、サウロを見つげ出し、アンティオキア教会に連れ帰った。二人は、丸一年の間、一緒にいて多くの人々を教えた。この間、バルナバの指導を受け、サウロは素晴らしい成長を遂げた。パウロにとって、バルナバの存在は大きく、バルナバなしにはパウロはなかったと言えよう。

アンティオキア教会で、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになった。キリスト者はギリシア語で「クリスティアノイ」で「キリストに属する者」という意味である。彼らは自分たちのことを、二言目には「クリスティアノイ」と言っていたので、回りの者たちからも、「あいつらはクリスティアノイだ」と呼ばれたので、信徒の名称がその時以来「キリスト者」となった。このアンティオキア教会から、パウロたちの異邦人伝道旅行が始まっている。異邦人への宣教活動を推進する教会となっていったのである。